

114
A3110
1



貿易並に通用貨幣論

歴史
第一章

大正十一年四月

ノ巨額ナル日費ハ皆テ該國人民ノ膏血ヨリ出ツル者ニシテ是レ貿易場権衡ヤノ一大緊要ノ條件ナリト若シ此説ニシテ果シテ真理ノ存スル者アリトセ日本國內ニ一外人ノ現存ハ其人民ノ頭上ニ被ルル可キ損害ノ量衡ニシテ其害タルヤ在住外人ノ増加ニ從テ愈々加倍ス可キ者トナルニ大隈公閣下ニハ大ニ正貨ノ濫出ニ歎カレ國庫ノ空乏ノ人民ノ貧困ハ是レ一ニ外國貿易ノ不平均ナルニ

太
女



依ル者ナリトセラレタリ今該ノ巧緻ナル新説ニ就
テ一ノ眞ス可キ疑團アリ曰該國民カ吸取セラレタ
リト為ス所ノ鑛金ハ何レヨリ來ル者ニシテ其多
分ハ何人ノ掌握ニ皈シ而後如何ニ配置セラレタリ
ヤ
抑モ日本人民カ初メテ外國貿易ヲ開キシハ日本ノ
貿易商等ハ未タ以テ市上ニ携出ル可キノ高品ナシ
故ニ其輸スル所ノ船荷ハ概テ皆銀貨ニテアリキ先
試ニ一千八百六十年ヨリ全六十八年ニ至ルハ貿易
表ヲ見ヨ其貿易ノ權衡ハ却テ日本ノ方ニ重キト三

千万弗ニシテ尚又外人カ所有ノ地所家作ニ課ス可
キ價直ニ由テ増加ス可キ傾向アルトヲ知ル可キナ
リ爰ニ論スル所ノ者ハ總テ正債ハ日本國ヨリ吸取
セシ者ナル乎又其吸取ハ外國貿易ノ結果ニシテ現
貨ハ其貿易上有利ノ菓實ナル乎ヲ辨明スルニア
原初ノ貿易條約中ニ貿易ノ目的ニハ只日本ノ正債
ノミ用ヒラル可シトノ條ヲ備エ政府モ亦鑄造ノ費
用ヲ算セス單ニ量數ノミヲ以テ日本正債ト外國正
債トヲ貿易セシメントテ企圖シタリキ今此企圖ニ
由ルハ墨希斯一銀ノ當價ハ日本銀三分ト一

ナリト確定セラレタリキ
右ノ現定ハ一ケ年間施行ノ約束ニシテ期末ニ至リ
條約國ノ内改正ヲ要スル片ハ再ニ之ヲ僉議ニ付ス
ル可キノ見込ナリシ蓋シ該ノ企圖實際ノ情况ハ當
時横濱ノ在住人ヨリ龍動ナル利財官ノ有名ナル主
宰一ノ報道ニ明カナリ而シテ其書日附ハ千八百六
十七年ノ九月ニ係ル者ニシテ當時現ニ其状況ヲ目
撃セシ人ノ書ナルヲ以テ其抜撮ハ窠モ有力ナル者
ナリトス其書ニ曰

該現定ハ窠初ヨリ早ク其弊ヲ顯ハシタリ外國商

人ハ外國ノ正貨ヲ以テ税関ヨリ日本ノ銀貨ヲ得
ルニアラサル内ハ日本ノ市場ニ入ルヲ能ハス而
モ日本政府ハ窠多量ノ資本ヲ有スル外國商カ不
断ノ請求ニ應ス可キ充分ノ銀貨ヲ鑄造ス可キ手
段ナカリキ

是ニ於テカ日本政府ハ外國高カ多量ノ請求ヲ為
スモ其実斯ノ如キ多量ノ資本ヲ有スルヲ信シ能
ハシトノ口實ヲ以テ爾來引換ノ請求スル者ハ官
ヲ帶フル者ノ外總テ請求高ノ幾割ヲ減シテ引換
ヲ許可ス可シトノ令ヲ下セリ詎ノ令ノ影響トシ

テ當時佛朗西葡英牙爾兩國ノ領事官ヲ兼タル人
ノ主任セシ支那商會カ獨リ其資本ノカラ竭ケシ
テ貿易ヲ營ム可キ專利ヲ得テ而シ其他ノ商會ハ
總テ手中資本ノ單々一部分ノミノ營業ニ制限セ
ラレタリキ

之レカ為メ大ニ外商ノ不平ヲ惹起シ其弊ノ至ル
所終ニ賄賂ヲ使用シ稅関ニ於テハ各商カ請求高
ヲ何個數ニ由テ除シ其得數高ノ引換ヲ許ストノ
實ヲ探知シ請求人等ハ其請求ノ全高ヲ得ルカ為
メニ豫シメ其數ニ由テ乘スルノ奸策ニ陥ヒリ其

後復々稅関ニ於テ除數ヲ増シタリト知り再々乘
數ヲ増シ斯クシテ終ニ一千八百六十年ニ至リテ
彼ノ如キ大混雜ヲ醸シ橫濱商會ニハ彼ノ如キ汚
名ヲ招クニ至レリ

右ノ振撮ハ貿易ノ当初ヨリ巨額ノ正貨ハ却テ外人
ノ手ヨリ輸入サレタルノ確証トス可キナリ當時外
國商會々貿易ノ為メ輸入正貨ノ貳拾万串ヲ有スル
トハ大抵普通ノ事ニシテ且如何ノ事情ニ係ハラス
常ニ此額ヲ減セシトナク又幕政ハ日本正貨ノ量目
ノ多キヲ以テ當時在住ノ外商カ請求ニ應シ銀ニ外

國正貨ト交易スルヲ能ハカリシハ古キ在住人ノ委
ク記臆スル^所ナル可シ

外國交際ノ以前ハ幾ント通貨ナル者ナリ諸大名ノ
歳入ハ米ノ石數ヲ以テ通算セシ者ニレテ只日用流
通ノ小貨以エニ至テハ大槩後日ニ政府ノ紙幣ト引
換エラレタル大名ノ預リ手形ノ類ノミニレテ貿易
通貨ノ用ニ適ス可キ者テカリシナリ

日本ノ貿易概シテ外人ノ損亡トナリシトノ説ニ抗
争スルノ人ハ實ニ僅クニ過キス初時移住人ノ中ニ
ハ一二金銀ヲ儲積シタル者アリト云氏一千八百六

十六年以來政府ヨリ特別ノ條約ヲ得タル者ノ外其
事業ノ結果トシテ其資本ヲ増ス^トナク却テ損減ヲ
招ケサリシ者ハ果シテ何人トナス乎未タ其人ヲ指
名スル^ト能ハサルナリ竊モ公平ナル外人ノ經驗ニ
由レハ貿易ノ利潤ハ全ク日本人民ノ手ニ占有セラ
レ創業ノ外國商ハ或賢明ナル当路者カ所謂外人ニ
利アリテ内人ニ損亡ナリトスル所ノ貿易ニ由テ当
初着手ノ日ヨリモ次第ニ其財ヲ損亡セリ
今仮リニ外人ノ巨費ハ日本ノ財資ヲ以テ支弁スル
者ナリトスルモ其議論ハ公使領事軍艦商船等ニ違

ス可キ者ニシテ爰ニ一是ヲ云フハ大ニ其論地ヲ誤
マリタル者ナリトス而シテ該費用ハ總テ紙幣ヲ以
テスレモ外國通貨ハ先ツ正貨ヲ以テ買入レサルヲ
得サレハ諸銀行ニ於テハ實際其等ノ為メニ正貨ヲ
輸入セサルヲ得ス是ニ於テ乎正貨ノ輸出ニ巨ナル
餘分アリトモモ報告書ニ由レハ其實際輸出ノ多額ハ
政府ノ為メニ造幣局ニ於テ鑄造レタル正貨ナルヲ
知ルナリ又輸入スル所ノ正貨ハ商人需要ノ為メニ
重モニ「墨希斯」銀ナリトナス故ニ余輩ハ數個人決論
ニ達スルヲ得タリ曰日本國民カ所有スル所ノ財産

ハ皆ナ外國貿易ヨリ結果セシ者ナリ又曰日本開港
ノ初ニ方リテ日本ニ拂返ス可キ剩餘ハ悉皆現貨ヲ
以テセレカ令ヤ然ラス日本人民ハ其剩餘ヲ重モニ
輸入品ニ於テ受取ラントヲ要スルカ故ニ其餘量ノ
ミハ總テ正貨ヲ以テ仕拂フ可キ事トナリタリ
然テハ則チ今日日本ノ商人カ其商品ヲ外人ニ賣与レ
其正貨ヲ以テ再々商品ヲ仕入ル可キ紙幣ヲ買取リ
タル時ハ外國貿易ニ由テ持込ミタル正貨ハ果シテ
何人ノ手ニ移リレヤ夫レ通貨ハ政府ノ特権ナリ故
ニ若干回ノ紙幣ニ易エテ其紙幣ノ價額ヲ受取ル

ヲ得ヘシ是ヲ以テ新紙幣ノ巨大ナル額ハ市上ニ於
テ賣出カレタリ之ニ由テ正債ハ一旦國庫ニ流入シ
政府ハ復タ外國ニ於ケル需要ニ充シカ為メ龍動為
換ニ仕組マサルヲ得ス是ニ於テ正債ハ再ニ銀行ノ
手ニ渡レリ故ニ通債カ其價直ヲ保スル間ハ人民滿
足ニ政府幸福ナル可レト虽此一日紙幣カ其需要ニ
超過シ其超過高ノ捌ケ口ヲキハ賣者ヨリ割引ヲ
拂フニ非ラサレハ新紙幣ノ賣買ハ忽マテニ其路ヲ
絶ツ可キナリ願フニ一千八百六十八年尔来政府カ
外國ノ正債費用ヲ壹億万圓ト見積ルモ敢テ過當ニ

アラサル可レ抑モ政府カ旧幕府ニシテ政務ノ引渡シ
ヲ受ケタル時ニ國庫ノ有様ハ恰モ人ノ目ヲ驚カス
可キ程ニシテ新任ノ主宰ニハ信用ニ能ハサリレ程
ノ金銀ヲ貯藏シタレハ外見ニハ幾ント永久竭ク可
クハ見エサリキ且又旧幕ノ知者ハ外交ニ由テ惹起
ス可キ緩急ニ應スルノ具備トシテ外交ノ実果ヲ暫
ラリ措テ論セズ此時ニ方リ文明ノ萌芽ハ未タ發セ
サリキ然レハ復古維新ノ盛舉アリテヨリ政府ニ於
テ外國品ノ需要^{漸ク}從來ノ蓄財ハ速ニ消エテ陸海
軍及ヒ其他新政府ノ必需品ニ變シ一度大蔵ノ管轄

カ大隈公閣下ノ手ニ遷リシ時ヨリ、從來蓄積ノ多
半ハ殆ント消滅ニ属セリ且閣下ハ愈ニ事業ノ盛ニ
テ固リテ公ニ七千三百三十拾貳万五千四百四拾四円
ノ紙幣ヲ発行シ而シテ其多半ヲ貿易ヨリ導キタル
正貨ト交換シテ委ク外國ニ輸出シ終ニ発行者カ其
紙幣ノ危嶮ヲ防クテ能ハサルニ至レ政府若シ無
益ナル事業ノ為メニ右ノ如ク正貨ヲ外國ニ輸出ス
ルトナクシハ正貨ハ其跡ヲ本國ニ絶クス随テ斯ノ
如キ不信用ナル不換紙幣ノ数ヲ増ストナリ依然ト
シテ貿易上ニ確實ナル用ヲ為セシメ疑フ可キニテ

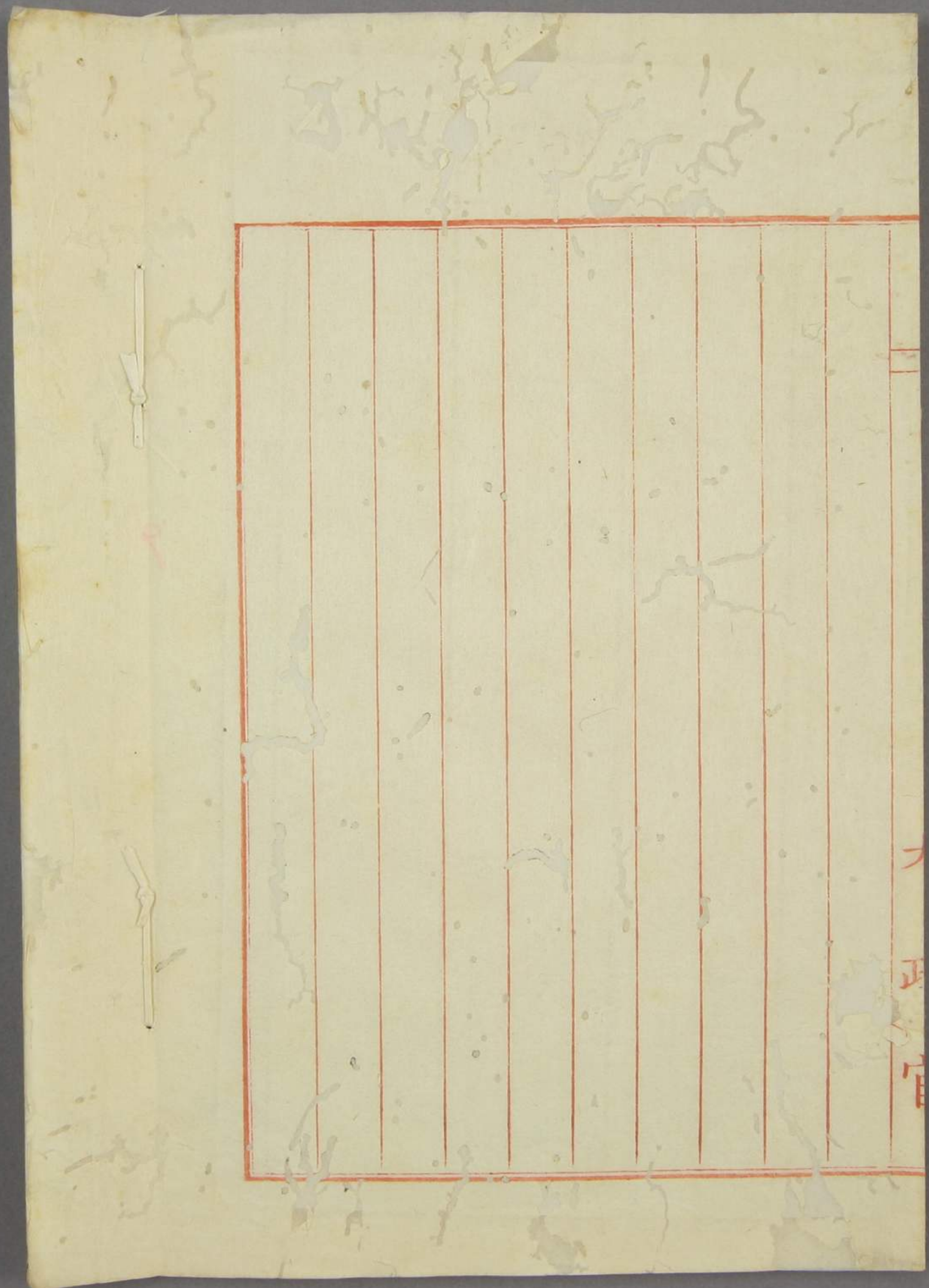
ナル可シ外國貿易ノ利潤ハ猶ホ三ノ不当ナル政府
ノ関涉ニ由テ減殺サル、ヲ免カレスト虽氏貿易上
ヨリ生スル所ノ利益ハ最早政府ノ紙幣ヲ以テ交換
サル、可キニアラサルナリ故ニ人民商業ノ權衡如
何ニ係ハラス貿易上通貨ニ餘計ニ需要ヲ生セサル
以上ハ決レテ政府ノ流通紙幣ニ影響ヲ來タスナ
カルヘシ何トナレハ則チ人民商業ノ利益ハ專ラ人
民ニ属スル者ナリ政府カ初メ人民ノ手ニ属セシ
正貨ヲ返附スルヲ以テ其負債義務ヲ償ナイシト
ナス如ク人民ノ手ヨリ其負債主ナル政府ノ手ニ移

ツリ行クヘキ者ニアラサルナリ

是ニ由テ之ヲ觀レハ外交ノ初メニ於テ日本カ多
ノ地金ヲ有セザリトスレハ(四幕ノ行政官カ貿易
ノ為メ使用シタルメ)
高カ當時微弱ヲ以テ貿易ノ需要ニ(三)現時日本國民カ有
スル所ノ地金ハ尽ク外國貿易ノ結果ニアラスレテ
何ソヤ初メ人民カ地金ヲ得テ政府ハ預リ手形ヲ以
テ之ヲ借リ入レ終ニ變レテ海陸軍ノ兵備トナリ三
菱會社ノ汽船トナリ或ハ錢道電信トナリ公使領事
公館ノ費用ヨリ其他正債ヲ以テ仕拂ヒタル百般ノ
費途ハ皆テ是レ正債ノ輸出ト預キ形ノ下落レタ

ル真ノ原因トナス可キナリ

猶其他讀者ニ向テ數多閑接ノ証憑ヲ明示セント欲
スレ氏如何セン紙上ニ限リアルカ故ニ爰ニ筆ヲ擱
カサルヲ得ス然レ氏以上陳フル所ヲ以テ日本商業
ノ進歩及ヒ其結果ノ得失ヲ公卒ニ注目スル人ノ贊
成ヲ惹クニ足ルベキヲ信シ且特ニ本土諸新紙ノ所
見如何ヲ質サント欲スルナリ



六
正
官